長寿を祝い 村内五会場で敬老会

横越会場

敬老の日の九月十五日には、村内五会場で敬老会が開催されました。

郵政大臣より小杉今井ムメさんに白寿のお祝い状

今年は七十五歳以上の七百四十九名の方が対象です。各地区では来賓の祝辞に続き、県や村、社会福祉協議会及び郵政省などからの長寿を祝う贈り物が手渡されました。

このあと、心づくしの折り詰めと飲み物などが用意され、祝宴が開かれました。婦人会などによる民謡や歌謡ショーなどのアトラクションでなごやかに敬老の日を楽しまれていました。

県下では十番目に若い村

年々高齢化が進むなかで、村内の六十五歳以上のお年寄りは6月末で千五百八十三人で一六・二%です。全国平均一四・一%より高くなっていますが、県下では十番目に若い村となっています。

横越村長寿者ベスト10
（9月15日現在）

①小杉上	今井ムメ	98
②沢海上	別所キヨノ	96
③焼山	井口藤三郎	95
④小杉下	渡邊キヨ	95
⑤二本木中	井越ヨシノ	94
⑥木津上	宇野トシ	94
⑦沢海上	佐藤キヨノ	93
⑧沢海中	田中ヨシミ	93
⑨小杉上	宮嶋英作	93
⑩二本木下	原ハナ子	93

各町村から三チーム総勢百二十名ほどが参加、三コートに分かれ町村対抗のリーグ戦方式で熱戦が繰り広げられました。その中で横越チームは二コートで優勝しました。

表彰式の後は中央公民館で懇親会が開かれ、交流を深めました。

第12回中蒲郡老人クラブ連合会 親善ゲートボール大会

九月六日に老人福祉センターゲートボール場で郡内の四町村の老人クラブ親善ゲートボール大会が行われました。

この大会は郡内の老人クラブの活動として、ゲートボールを通して健康づくりという共通の願いを持つ会員の連帯感を強め、親睦を深めようとするものです。

ゲートボールで健康づくり

大区画による直まき栽培 実用化へ一歩前進

小杉の大区画実験圃場で九月八日、稲刈りが行われました。今回収穫したのは乾田直まきによる「わせじまん」で、昨年に比べ、約一か月ほど早い収穫となりました。

この圃場は低コスト稲作をめざし、一区画一・五㌶と広いうえ、種もみの直まきにより省力化を図ろうと実験を行っているものです。

三年目になる大区画実験は、昨年から乾田直まきと無代かきたん水散ぱに挑戦。たん水散ぱは発芽の遅れと雑草発生が早かったため、途中で移植栽培方式に変えざるを得ませんでした。

乾田直まきは刈り取り前の坪刈りでは十㎡当たり六百四㌘と昨年より七十㌘の増収の好成績でしたが、実際に収穫してみると五百四十㌘と昨年並にとどまりました。これは、苗立ち期にハトやカラスの被害にあったためによるものです。

昨年の冷夏、今年の猛暑と両極端な気候にも乾田直まきは一定の収穫が得られることが実証されました。今後は鳥害対策をいかに行うかが、実用化への決め手となるようです。

大型コンバインで刈り取り

横越農業探訪

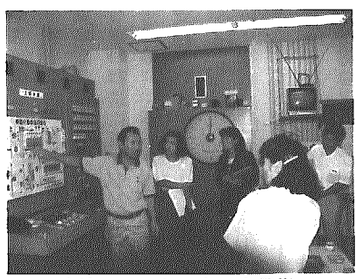
九月十三日に「阿賀の里づくり、よこごし」交流部会（部会長串田修平）では農業探訪を行いました。

参加者は部会委員五名を含め関係者十二名で、最初に沢海地区を訪れ、切花栽培や野菜を中心に見学しましたが、特に花にはいろいろな質問が寄せられ、答える側も大変なようでした。

続いて木津、二本木地区ではライスセンターや果樹集出荷場などを訪問。巨大なライスセンターの機械群には驚きの様子。また、新鮮な果実の前では一箱づつ覗きこみ、品定めをしているようでした。

最後に一区画一・五㌶の直播栽培を行っている小杉地区をおとずれ、稲栽培の先端技術や酪農経営を見てまわりましたが、半日という短い日程で、横越村農業の実情を十分に把握できたとは言えなかったようです。

機械化が進み省力化が図られていることや、様々な作物が栽培されていることに一同感心していました。


木津ライスセンターを見学

美浦村交流記 美浦中交歓会に参加して

三年三組　高橋　いずみ

八月十八日、十九日と、私達生徒会役員、学年委員の約二十名は、横越中学校の代表として、姉妹校である美浦中学校へ交歓会に行ってきました。

一日目は筑波山登山、そして夜には「文化祭をどうするか」というテーマにそって話し合いが行われました。二日目には美浦中で歓迎集会に参加し、その後JRAのトレーニングセンター見学をしてきました。

この二日間で私達は、しっかりと意見を交換し、友情を深め、お互いに、楽しい時間を過ごしてきました。また、先生方にも親切にしていただき、とてもよい交歓会ができたと思います。

石井太一氏の寄附金でグランドキーパを購入

五月に亡くなられた石井金吾氏のご遺族石井太一氏から、教育振興のために使ってほしいと百万円の寄附がありましたが、教育委員会ではいろいろ検討した結果このほど中学校にグランドキーパを購入しました。

この機械は中学校の野球場、陸上フィールドの整備はもちろんのこと、小学校のグランドやテニスコートにも活用する予定です。今まで野球部員が総出で二十分ほどかかっていたグランド整備もなかなか大変な作業でしたが、この機械だと十分程で簡単にできます。また、雑草退治にも大いに効果があるものと期待しています。

あらためて、ご厚志に感謝致します。

北極圏に白鳥を訪ねて（後編）

日本白鳥の会・日本山岳会々員
本間一人（横越上）

劇的な062Cとの再開

七月四日は現地の初日でもあり半日行動ウェーダーを履いて湿地帯を二十分程歩くと白鳥があらわれる。抱卵の様子や巣の様子を観察する。足元には高山植物がビッシリと咲いていて踏まずには歩けない。その中にガンコウランが去年の実と今年の実をいっぱいつけている。コケモモも赤い実をつけている。甘いこれらの実も白鳥の餌だ。

翌朝標識鳥がいるということでテントを持って偵察に出掛けると、砂丘に近い中州にそれらしき白鳥がいた。ブラインドのテントを張って早々に引き上げる。途中クビワカモメの営巣地を通過すると、私達の上空から急降下をして攻撃してくる。ヘルメットを被らないと危ないという。必死になって巣を守っているのだ。

夕食時あの標識鳥は062Cだという。私はびっくり仰天、まさか九年前に福島潟で撮影した白鳥がいるとは。興奮の一夜が明けて観察にでかける。ブラインドに入ると急いで双眼鏡を覗く。いた、紛れもなく062Cだ。どう表現すればいいか分からないほどの興奮状態だ。そして数分後にドラマが起きた。雄が飛来して雌と抱卵を交替したのだ。夢中でシャッターを切る。雌は右手の湿地に上がり餌をついばんでいる。

無数に点在する湖沼は少し潮けがあり、絶え間なく吹き付ける北西風で岸辺に潮の花ができる。白鳥が同化し、特に小さな雛にとっては白夜とともに天敵から身を守るのに好都合だ。

七日は朝から北西風が強く吹雪だ。そんな中でも偵察は続けられた。この日半数の団員が雛の観察に出掛け、我々の班は翌日二隻のボートに分乗してチャウン川の河口に向かい、V字状に小さな川を少し逆かのぼった地点で上陸。雛を見たら即、巣を離れるのでカメラを用意し、フィルムを入れ替えた。私にとって初めて白鳥の雛との対面だ。はやる気持は湿地に足を取られる。いた、三羽の雛だ。親鳥は私達を威嚇しながら雛をつれて水の中に逃れる。一昨日と昨日みよけたらしい。なんとも可愛い姿を水面に浮かべ、親鳥に見守られながら泳いでいる。

ステーションに帰り、再びブラインドに観察に出掛ける途中、非繁殖鳥を観察に出た二人が平原の彼方に小さな点となって見えてきた。早速トランシーバーで交信すると、標識鳥064Cを確認とのこと。この鳥も新潟平野に毎年やってくる。

翌日帰るヘリがなかなか来ない。やっとヘリが来るが別の所へ行くものだった。男女二人が降りて来た。朝日新聞の記者とモスクワ支局のエリーさんだ。ここより少し北のペベクで吹雪のため一週間缶詰めになっていたと云う。我々も予定通り帰れるのだろうか。

062Cを双眼鏡で観察していた団員からの報告で雛が巣から出たらしい。カメラをもって撮りにいくと、二羽の雛が親鳥と泳いでいる。夢中で感激のシャッターを切った。

062C親子を越後平野で見た方ご一報下さい。
電話　385－2225